

上海「ミニ」通信

(北九州市 上海事務所から中国・上海の「今」をお伝えします！)

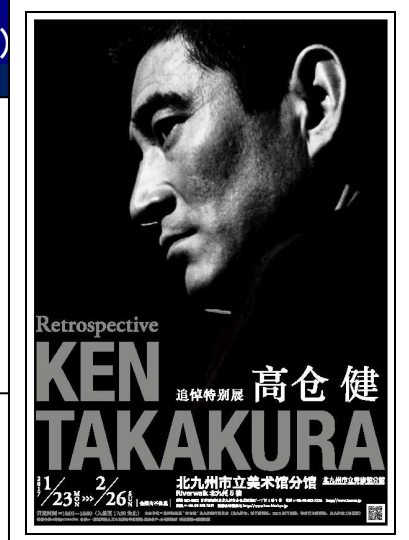
来年1月23日から2月26日まで、リバーウォーク北九州の北九州市立美術館分館で、追悼特別展「高倉健」が開催されます。中国では、「高倉健」の名前は、知らない人はいないほど、有名だと聞いたので、試しに実際どうなのかを調べてみると、ひとりの俳優の演技を超えた、日中の文化交流の歴史と、日本の文化の影響力の強さを垣間見ることができました。

平成 28 年 11 月 30 日

【第8回】中国での「高倉健」の存在について

【今日のポイント】

- ◆ 高倉健は中国で間違いなく、最も有名な日本人のうちの1人のようです。特に1970年半ば以前に生まれた、30歳後半以上の人の中で、（私がこちらで聞いた限りで）「高倉健」を知らない人は一人もいませんでした。
- ◆ 高倉健の映画は、文化大革命後最初に上陸した外国映画で、当時の中国人にとって新しい時代の象徴でした。
- ◆ 日本の映画、アニメなど、日本の文化、ソフトパワーの影響力を実感。今後、この力を本市のPRなどに活かしていくのが、当事務所の責務だと思い、こちらでプロモーションしてみたいと思います。



1 高倉健は、中国でどんな存在（だった）なのか？

高倉健さんが亡くなったのはちょうど2年前の2014年11月でした。その時、中国の国営テレビ CCTV が全国ニュースで、そのニュースを報道するだけでなく、中国の外務省にあたる外交部の報道官が「高倉健さんは中国人民がよく知る日本の芸術家で、中日文化交流のために重要な役割を担った」という追悼コメントを出したほどだったようです。ちなみに、当時の日中関係は、高倉健さんが亡くなる直前の APEC 首脳会談で、安倍首相と握手した際の習近平国家主席の(無)表情が日本で話題になった頃でした。

「高倉健」という俳優が有名になったのは、1978年に中国で最初に上映された「君よ憤怒の河を渉(わた)れ」という映画がきっかけで、当時、1億人の中国人が映画館に足を運んだと言われます。それから約40年近く経った今でも、多くの中国人の記憶に強く刻まれているのは、1978年という、上映のタイミングと深くかかわっているようです。

2 中国にとっての1978年という年（「高倉健」=文化大革命後の新しい時代の象徴）

1978年は、言論、思想の自由などが大きく制限された「文化大革命」の終焉を迎え、鄧小平が権力を掌握し、「改革開放」に踏み切った、中国にとって非常に重要な意味を持つ年でした。その年に来日し、新日鐵や松下電器などを訪問した鄧小平が、日本の技術や経営を目の当たりにし、日本を目標にし、経済発展への決意を新たにされたと言われています。

そんな中で、政府間の日中文化交流プロジェクトの一環で、上映された映画のひとつが「君よ憤怒の河を渉れ」でした。これは、文化大革命後、最初に上陸した外国映画で、血の通ったヒーローが冤罪からの名誉回復をめざすという商業映画が、それまでの紋切り型のプロパガンダ映画とは違うものを求めていた中国の人々の心に深く刻まれ、同時に日本へのあこがれをかきたてたということのようです。

3 日本の文化の影響力とソフトパワーを痛感！このコンテンツをどう活かせるか？

多くの現在の若者にとっては、「高倉健」は、自分の両親、または祖父母の時代のヒーローというイメージかもしれません。

しかし、中国における高倉健のように、ある時代の人に影響を与えた外国人俳優は他にあまりいないのではないのでしょうか？ 経済力や政治力ではない、日本の文化の力、いわゆるソフトパワーの影響力を改めて感じるどころです。

これは一俳優の例に限らず、日本の文化の中国での影響は、今の上海にあふれている無印良品、ユニクロやキティちゃんなどの中国での浸透の度合いを見ても痛感させられるところではあります。

せっかく、高倉健追悼展が、ゆかりの地である本市で、しかも中国の大型連休(春節)中に、開催されるのでこのコンテンツを使って、追悼展の宣伝とともに、本市のPRにも活用したいと思います。さてどれくらい通用するのでしょうか？ 楽しみです。

